



図書館だより



えんやこらイブラリアンを育てる

合同図書館では、昨年からレファレンスカウンターを新たに設置し、毎日午前中の試験的運営を始めた。不確かな手がかりしかなかったり、あるいは手がかりすら見つけられないというように、求める資料や情報がどこにあるのか見当がつかず困っている会員をサポートすることが目的で、弁護士業務支援の一環と考えている。図書館では日常業務の処理に手一杯で、これまで十分に対応できなかったこうした問い合わせにもお答えしていこうという試みである。

多忙な業務をこなしながら新たにレファレンスカウンターの運営も始めることに、当初、事務局には大きな不安があった。始めてからこの半年ほどの実績を見ると、確かにむずかしいお問い合わせも少なくなく、求める資料そのものにたどり着けなかった事例もある。必ずしも満足のいく回答を得られなかった方もいるかもしれない。しかし、多くの場合、何らかの手がかりは提供できたと思う。それらのうち参考になると思われる事例のいくつかはこの欄で紹介してきた。

最近では図書や雑誌の目次情報もできるだけ詳細に入力しているので、蔵書データの検索で簡単に見つかる資料も多い。また、インターネットで入手できる情報も少なくない。それでも見つけられなかった情報を探すとなれば、ここがライブラリアンの腕の見せどころ。とはいえ、情報検索の様々なツール（基本書の知識や紙媒体の索引から便利なウェブサイトまで）に精通していることと、自館の蔵書構成を十分把握していることが求められるので、レファレンスカウンター担当の日は緊張する。「手ぶらで帰さないサービス」を合言葉にがんばることで職員もスキルアップしていく。

会員が求める情報の多くは合同図書館の蔵書から探し出せるのではないかと私は思っている。そこで、問い合わせを受けるとまず、見つかるものか見つけられないものか、嗅ぎ分ける。見つかりそうだとすれば、様々



レファレンス中の筆者

なツールを駆使するだけでなく、図書や雑誌の現物にあたって必死で探す。蔵書にはなさそうだと思えば、検索に時間を使いすぎないように、むしろほかの図書館や情報センターにないか調べる。蔵書をよく見ていないと、この嗅覚が働かない。そして、図書データ入力作業だとか書架整理作業だとか、単純作業と思われがちな仕事がこの嗅覚を培うのである。机の前でパソコンをにらんでいるだけでは身につかない。スキルをもったライブラリアンは、時間をかけて作られるのだ。

図書館は「人」である。どんなに機械化を進め、蔵書を増やしても、難しい問い合わせに逃げ出すような「すたこらイブラリアン」では、利用者は図書館の中で途方にくれるばかりで、求める情報にたどり着けない。目的意識をもってスキルアップに努める「えんやこらイブラリアン」がいてはじめて図書館は会員の役に立つ。弁護士を囲む状況は今後厳しさを増すという予測もある今、会員を支える大きな力となるライブラリアンの育成に会を挙げて取り組んでほしいと切に願う。3年間の図書館事務長を退任するにあたって、国内でも類を見ない法律実務家のための図書館のさらなる発展を心から願って稿を終えたい。

(合同図書館前事務長 梅原 成子)